
君のいる場所へ

おあっき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいる場所へ

【Nコード】

N7321W

【作者名】

おあつき

【あらすじ】

新年度、高内大成は今日から東京都立豊島工業高校の一員となる。入学式に向かう途中の電車で駆け込んだ女はなんと同じ学校の同じクラス。

そして大成はクラスで委員会決めで立候補した委員会に、合わせるかのようにその女も立候補してきた。そのことに大成の脳は困惑した。

高校生活を主体としたラブストーリーのスタートです。

#01 運命的な出会い

（ジリリリリリリ……。ガチャ。）

目覚まし時計がなり、すぐに止まった。

「ん〜ん。もう朝か。寝てると朝来るのはえ〜。」

大成が言った。そしてサクサクと制服に着替えた。今日から大成は高校生になるのだ。

「大成〜！ご飯！」

母の声がする。

「はいよ！今行く！」

大成が言った。大成は部屋を出て一階にあるリビングへと向かった。今日の朝ご飯はチーズトースト。平日の朝は決まっていたのもチーズトーストだ。大成はサツと平らげた。

「行ってきます！ちゃんと入学式来てよ！卒業式来てくれなかったんだから！」

大成が言った。

「分かってる！」

母が答えた。

（ボタン。）

ドアが閉まった。

（まもなく、2番ホームに通勤準急池袋ゆきが10両編成でまいります。危ないですから黄色い線の内側までお下がりください。）

アナウンスが流れ、電車がやってきた。

（プシュ〜。ボタン。）

ドアが開いた。

（ご乗車ありがとうございます。秋津〜。秋津です。）
駅員が言った。

（トゥルルン。トゥン。トゥルルン。）

発車メロディが鳴った。

（ドアを閉めまゝす。ご注意ください。）
駅員が言った。

（待って〜！乗りまゝす！）
一人の女が駆け込んできた。

（プシュー。ボタン。）

ドアが閉まり、電車が動き出した。

（何だよ！こいつ。次の電車待てっつうの！）
大成は思った。しかし大成はあることに気づいた。
（待てよ。この制服。もしかして・・・。）

大成は再び思った。

23分後。

（プシュー。ボタン。）

ドアが開いた。

（ご乗車ありがとうございます。練馬、練馬に到着です。）
駅員が言った。

（ふう〜。やっと着いた。マジ電車混みすぎだし。遠すぎだし。）
大成は思った。そんなことを思いながら改札を出た。しかし練馬駅から学校までは徒歩でまだ30分もかかるのだ。

30分後。

（おはようございます。新入生は名簿をもらい、教室へ行ってください。）

先生が正門で説明している。

（スタッ。スタッ。）

大成は昇降口まで行った。

「ご入学おめでとうございます。」
先生が言った。

「ありがとうございます。」

大成は言い、名簿を見た。

（え〜と。高内大成……。高内……。あつ。あつた！3組か。）
大成は名簿の中から自分の名前を見つけ出し、教室へと向かった。

（ガラガラ。）

教室の扉を開けた。しかし、皆緊張しているのだろうか。教室はシーンと静まり返っている。そして大成は黒板に掲示してある、座席表を確認した。すると座席は窓際の列から数えて3列目の前から3番目だった。場所を確認して席に着いた。

（ガラガラ。）

教室の扉が開いた。すると、教室にいる人たちが一斉に扉のほうへ向いた。

（あゝ！あの時の！）

大成は頭の中で叫んだ。しかも大成の隣の席に座ったのだ。

（俺が15番ってことは、隣は21番……。）

大成は再び名簿を見た。すると“日生紗英”と書いてあった。しかし大成は“紗英”は読めたが、“日生”は何と読むか分からなかった。

（キンコンカンコン。）

チャイムが鳴った。

（ガラガラ。）

先生が入ってきた。

「おはようございます。新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。今日から1年3組の担任になりました。新高成増です。よろしく願います。さて、入学式があるので廊下に出席番号順1列に並んでください。」

新高先生が言った。

そして入学式が始まった。

「これより第63回東京都立豊島工業高等学校入学式を挙行いたし

ます。一同ご起立願います。」

副校長先生が言った。

しばらくして生徒呼名が始まった。

たかつちおおなり
「高内大成。」

新高先生が言った。

「はい。」

大成は答えた。生徒呼名は続いていきとうとう21番になった。

ひなせやえ
「日生紗英。」

「はい。」

紗英が言った。

（へえ。あれで“日生”って読むんだ。普通読めない……。）
大成は思った。

1時間30分後、入学式が終了した。

「入学式お疲れさまでした。それでは、早速ですが委員会と係を決めたいと思います。今から先生が委員会と係を黒板に書きます。」

新高先生が言った。

先生が委員会と係を書き終わり、希望調査が始まった。

「じゃあ次。図書委員、やりたい人。」

新高先生が言った。

「はい！」

大成が手を挙げた。

「はい！」

すると、紗英も大成に合わせるかのように手を挙げた。

「他にやりたい人はいないですか？いないようなので2人に決定します。」

新高先生が言った。

（日生の奴、俺に合わせて手挙げたよな。てか、何で朝から日生の

事ばかり考えてるんだ？電車で駆け込んできた時からというもの・
・。
）

大成は思った。しかし大成の脳は困惑しているのであった。

#02 下校後

「協力ありがとうございました。おかげで委員会と係決めが早く終わりました。ついでに言いますが、一斉委員会が明日あります。集まる場所はまた明日お知らせしますが、とりあえず明日一斉委員会があるということだけ頭に入れといてください。」

新高先生が言った。

（キンコーンカーンコーン。）

チャイムが鳴った。

「ちょうどチャイムが鳴りましたね。ではこのまま終わりにしちゃいましょう。号令係の人、お願いします。」

新高先生が言った。

「起立。気を付け。礼。」

号令がかかった。

「さようなら。」

みんなが言い、礼をした。

「ねえ！高内くんだけ？一緒の委員会だね。私は日生紗英。よろしくね。」

紗英が満面の笑みで言ってきた。

「あ・・・うん・・・。俺は高内大成。よろしく。」

大成が言った。

（へえ。日生って意外にフレンドリーなんだなあ。）

大成は思った。

「じゃあ高内くん。また明日！」

紗英が言った。

「あ・・・うん・・・。また明日・・・。」

大成が言った。しかしまだ大成は戸惑っていたが、とりあえず学校を後にした。

（西武線をご利用くださいましてありがとうございます。この電車は快速飯能行きです。次は石神井公園です。お出口は左側です。石神井公園を出ますと次はひばりヶ丘に止まります。）自動アナウンスが流れた。

「はあゝ……。何なんだろう彼奴……。フレンドリーなのは良いけど……。もしかして……。まあ、そんなことは無いなあゝ。」

大成はブツブツと独り言を言っていた。

（プシュー。ボタン。）

ドアが開いた。

（ご乗車ありがとうございます。秋津、秋津です。）

駅員が言った。

「あー！高内くん！同じ電車だったんだ！」

紗英が言いながら走ってきた。

「そうみたいだね。てか日生も秋津なんだ。」

大成が言った。

「いや。秋津は一応通るけど、ここから武蔵野線に乗らなきゃいけないの。」

紗英が言った。

「最終的にはどこなんだ？」

大成が言った。

「最終的には府中本町。」

紗英が言った。

「府中本町かあゝ。遠いんだな。」

大成が言った。

「まあ最初はそう思ったけど、学校見学とかで何度か行き来してるからもう慣れちゃった。」

紗英が言った。

「そつかあ。まだ俺は慣れねえな。」

大成が言った。

「そうなんだ〜！まあ気を付けてね。」

紗英が言った。

「ああ。ありがとう。」

大成が言った。そして紗英は新秋津駅の方へと歩いていった。

「ただいま。」

大成が言った。

「あゝ大成。おかえり。」

母が言った。

（ボタン。）

ドアを閉めた。

「あつ！そうだ。着替えてからで良いから、買い物行ってきてくれない？」

母が言った。

「はいはい。わかった。後で行く。」

大成が言った。

「はあゝ。何だろう……。高校生活1日目にしてこの濃さ……。高校生ってこんなもんなのか？」

大成はブツブツと独り言を言いながら着替えた。

「で、何？買い物って。」

大成が言った。

「これ。メモしてあるからあそこのスーパーで買ってきて。」

母が言った。母が言う“あそこ”とは、大成の家から自転車を使わないと行けないほど遠いスーパーなのだ。

「はあ？あそこ行くの？めんどくさい。チャリ使わなきゃいけないんだから。」

大成が言った。

「お願いだよ。あそこが一番品揃えが良いんだから。」
母が言った。

「はいはい。わかったよ。行ってくれば良いんでしょ。」

大成はしぶしぶ応じた。

「ありがとう。」

母が言った。

「じゃあ行つてきます。」

大成が言った。

「いつてらっしゃい。」

母が言った。

（ちえっ！何で俺なんだよ！）

大成は自転車を漕ぎながら思った。

そして20分後、スーパーに到着した。

「やっと着いたあ。何度来ても遠い……。」

大成がぼそつと言った。

（ウィーン。）

ドアが開き店内に入った。

「えっと……。」

大成は品物をさつさと探しレジまで行った。

「お会計、1365円になります。」

店員が言い、大成は1500円を出した。

「135円のお返しと、レシートになります。ご利用ありがとうございました。」
ざいました。」

店員が言った。

「何でこんなに買わせるんだよ。持って帰るの重いんだから……。まあ帰るか。」

大成はまたもや、ぼそつと言った。すると、駐輪場に接している道路に見覚えのある人が自転車に乗って現れた。

（あれ？あれ日生じゃね？なっ訳ないか。）

大成は思ったが、勘違いだろうと思い、自転車を駐輪場から出した次の瞬間、その紗英らしき人が駐輪場に入ってきた。

（ハアハアハア・・・。）

そしてその紗英らしき人が息を切らしながら、ヘルメットを取った。

「あれ？高内くん・・・？何でいるの・・・？」

紗英が言った。大成が見た人はやはり紗英だった。

「何でつて。それはこっちのセリフだよ。てか、疲れてるようだけど大丈夫か？」

大成が言った。

「うん。ありがとう。大丈夫。私も買い物しに来たの。」

紗英が言った。

「わざわざ府中本町から？」

大成が言った。

「うん。サイクリング大好きだもん。」

紗英が言った。

「まあそのチャリならわからなくもないか。マウンテンバイクだもんな。・・・あつヤベエ！親に買い物頼まれてたんだ。ごめんな。」

また明日。」

大成が言った。

「うん。また明日。」

紗英が言った。そして大成は帰路についた。

「ただいま・・・。あゝ重い・・・。」

大成が言った。

「おかえり。お疲れ様。レシートちょうだいね。お釣りはお駄賃で良いから。あと、お風呂沸いてるから先に入っちゃって。」

母が言った。

「了解。でも玄関先で言わなくても・・・。」
大成が言った。

そしてお風呂にも入り夕飯も食べ終わり、大成は寢床についた。
（ふう）。やっと1日が終わった。なんか超濃かった。それに日生
と下校後に二回も会ってまじかよ。彼奴俺のことどう思ってるん
だろう・・・。）

大成は考えながら夢の世界へと入っていった。

#03 一斉委員会

次の日。

「行つてきます。」

大成が言った。

「いつてらっしゃい。」

母が言った。

「日生！おはよう。」

大成が言った。

「あつ！高内くん、おはよう。高内くんから話しかけてくれるなんて珍しいね。」

紗英が言った。

「いや、昨日は入学式の日で緊張しているところをいきなり異性から声掛けられて戸惑つてたけど、これから少なくとも二年間は一緒のクラスなんだからいつまでも戸惑つてたらいけないかなって思つて。」

大成が言った。

「そつかあ。これから二年間。よろしくね。」

紗英が言った。

「こちらこそ、よろしく。」

大成が言った。

（プシュー。ボタン。）

電車が来てドアが開いた。そして大成と紗英は電車に乗り込み、電車は発車した。

「あと、私の事は“紗英”って呼んで。中学校ではそう呼ばれてたから。」

紗英が言った。

「さ・紗英？でも慣れないなあ。名前で呼ぶの。」

大成は恥ずかしがりながら言った。

「そんなこと無いよ。別にそうやって呼んでって私が頼んでるんだから。」

紗英が言った。

「じゃあ、今度からそうするよ。」

大成が言った。

「ありがとう。」

紗英が言った。そうこう話していると、あっという間に練馬駅に着いた。

「あっ！そういえば今日一斉委員会があるって先生言ってたなかった？」

紗英が言った。

「そういえば、言ってたな。」

大成が言った。

「おはようございます。今日は昨日お知らせしたとおり、一斉委員会があります。集合場所のお知らせを黒板に貼っておきますので各自で確認して遅れないようにしてください。」

新高先生が言った。大成と紗英も黒板を見て図書委員の集合場所を確認した。すると“図書室（A棟四階）”と書いてあった。

そして放課後になった。

「紗英。行こう。」

大成が言った。

「呼んでくれた！ありがとう。」

紗英は微笑みながら言った。

「まだちよつと恥ずかしいけど・・・。」

大成は照れながら言い、2人は図書室に向け歩き出した。

「ところで紗英は、何部に入ろうと思ってるの？」

大成が聞いた。

「もちろん、サイクリング部でしょう。サイクリング好きだもん。高内くんは？」

紗英が答え、聞き返した。

「聞いたいてあれだけど、まだ決まってない……。だからといってこれがいなくなっている部活も無い……。」

大成が答えた。

「だったらサイクリング部入れば良いじゃん！」

紗英が勧めた。

「でも、自転車の事よく知らないし……。第一自転車もちゃんとした奴じゃないし。」

大成が言った。

「大丈夫だよ。自転車の事だったら教えてあげられるし、お姉ちゃんが使ってた黒いマウンテンバイクだったらあげられるし。独立して引越しちゃって使ってないから。」

紗英が言った。

「本当に？」

大成は驚いた。

「うん。お母さんも“誰かあげる人いない？”って言ってたし。」

紗英が言った。

「だったら入っても良いかな。じゃあお母さんに聞いといてよ。」

大成が言った。

「うん。わかった。」

紗英が言い、話し終わる頃には図書室に到着した。

そして一時間後、図書委員会の会議が終了した。

「はあー。疲れた。」

紗英が言った。

「さて、帰ろっか。」

大成が言った。

「そうだね。」

紗英が言った。

（プシュー。ボタン。）

ドアが開いた。

（ご乗車ありがとうございます。秋津、秋津です。）

駅員が言った。

「じゃあお母さんに聞いていてな。」

大成が言った。

「じゃあ聞いたらメールしたいから、メアド教えて。」

紗英が言った。

「わかった。」

大成は言い、赤外線通信でメアドを交換した。

「ありがとう。じゃあまた来週ね。」

紗英が言った。

「うん。また来週。」

大成が言った。そして2人は帰路についた。

#04マウンテンバイク

「ただいま！」

紗英が言った。

「おかえりー！」

母が言った。

「そういえば、自転車あげる人見つかったよ。」

紗英が言った。

「へえ。誰？」

母が言った。

「高内くんっていう人なんだけど・・・。」

紗英が言った。

「男の子？」

母が言った。

「そうだよ。別にサイズは“インチ”だから、男女関係ないでしょう？しかも自転車の色、黒だし。」

紗英が言った。

「まあ別にその子が良いって言ってるなら良いけど。」

母が言った。

「じゃあ大成くんにメールしとくね。」

紗英が言った。

「そういえば、クラスの女子に“マウンテンバイクいらないからあげる。”って言われたんだけど、マウンテンバイクもらって良いかな？それに“サイクリング部に一緒に入ろうよ。”とも誘われたし。」

大成が言った。

「部活でサイクリング部ね・・・。まあ良いんじゃない？今のチャリも古いし。どっち道にしろ、ウェアとかヘルメットだって買わな

くちやいけないんでしょう？」

母が言った。

「まあ・・・。」

大成が言った。

「だったら絶対にサイクリング部に入ることを条件にお金出しても良いよ。」

母が言った。

「ありがとう。」

大成が言った。

（ブー。ブー。ブー。）

大成の携帯にメールが来た。

（お母さんに聞いたら別にOKだって。急で悪いんだけど明日府中本町の駅に来れる？）

大成はメールを読み、母に見せた。

「その女の子の家が府中本町なのね。わかった。良いよ。別に予定無いから。ちゃんとお礼言いなさいよ。」

母が言った。

「分かってるよ。」

大成が言った。

（大丈夫だよ。明日府中本町の駅に何時？）

大成はメールを返信した。

（ブー。ブー。ブー。）

メールが返ってきた。

（返信、早くね？）

大成は思った。

（1時。）

大成はメールを読んだ。

（了解です。）

大成はメールをすぐに返信した。

次の日の午後1時。大成はJR武蔵野線の府中本町駅にいた。

「高内くん。お待たせ。」

すると紗英は、サイクルウェア姿で現れた。

「そのウェアかわいいね。」

大成が言った。

「そう・・・？ありがとう。」

紗英は顔を赤くし、照れながら言った。

「あれ？ウェア着てるけど自転車は？」

大成が聞いた。

「あゝ。基本、駅までは徒歩だよ。」

紗英が答えた。

「へえ。そうなんだ。」

大成が言った。

「まあ、歩いて5分ぐらいだからね。さあ行こう。」

紗英が言った。

「うん。」

大成は答えた。

5分後。紗英の家に到着した。

「お母さん！高内くん連れてきたよ。」

紗英が言った。すると家の奥から紗英の母が出てきた。

「あなたが高内くん？」

母が尋ねた。

「はい。高内大成です。よろしくお願いします。」

大成は答えた。

「まあ、紗英。とりあえず見せてあげなさい。」

母が言った。

「わかった。」

紗英が言った。

「紗英って家ではなんか違うな。」

大成が言った。

「よく言われる。それでこれがお姉ちゃんの自転車。これだったら別に構わないでしょ？」

紗英が言った。

「上等だよ！超かっこいいし。」

大成が言った。

「良かった。あとは、サイクルウェアとヘルメットだね。そういえば、お母さんからお金もらったらいいけどいくらもらったの？」

紗英が言った。

「一万円。」

大成が言った。

「それなら買いに行けるよ。」

紗英が言った。

「えっ？どこに？」

大成が聞いた。

「サイクリング用品店。サイクルウェアとヘルメットを買わなきゃでしょ？」

紗英が言った。

「あゝ。そつかあ。」

大成が言った。

「近くにいつも行ってるサイクリング用品店があるから行こう。あそこ結構安く売ってたりするし。」

紗英が言った。

「へえ。そうなんだ。まあ、紗英にお任せするよ。」

大成が言い、2人はサイクリング用品店に向かって歩き出した。

「ところで気になってることがあるんだけど。」

大成が言った。

「何？」

紗英が言った。

「あのタイプのハンドルって運転難しいと思うんだけど、実際はど

うなの？」

大成が言った。

「まあ、最初は難しい感じがするかもしれないけど、慣れればそうでもないよ。握り方だって色々と変えられるから疲れにくいし、体勢が前屈みになるから空気抵抗も少なくなってスピードも上げられるんだよ！」

紗英が興奮しながら言った。

「紗英って本当に自転車好きなんだな。」

大成が言った。

「えっ？何で？」

紗英が聞いた。

「さっき俺に説明してくれてたとき、明らかに興奮しながら言うてたから。」

大成が答えた。

「えっ？そんなに？」

紗英が言った。

「うん。そんなに。」

大成が言った。

「そっかぁ・・・。そんなに興奮してたんだ・・・。ちなみにサイクリング用品店ってココね。」

紗英は言い、2人はサイクリング用品店に入った。

「へえー。すげえー。たくさんある。」

大成はサイクリング用品店の品揃えの豊富さに驚いた。

「で、サイクルウェアとヘルメットはココね。」

紗英が言った。

「へえー。一口に“サイクルウェア”って言ってもたくさん種類があるんだな。」

大成はただただ驚くだけだった。

「まあ、サイクルウェアでもファッションセンスが求められる時代だからね。」

紗英が言った。

「えっ？でも俺、そんなファッションセンスなんて無いよ……。」
大成は困りながら言った。

「大丈夫。私が選んであげるから。」

紗英が言った。

「それだったら頼もしいや。頼むな。」

大成が言った。

「エヘヘ。任せといて。」

紗英は言い、大成と紗英はサイクルウェアとヘルメットを選び始めた。

そして一時間後。大成と紗英がサイクルウェアとヘルメットを買い終え、サイクリング用品店から出てきた。

「とりあえず、夏用はこれで十分。また、冬になったらこようね。って事で、とりあえず私んちまで戻ろうか。」

紗英が言った。

「そうだね。」

大成は言い、紗英の家に戻った。

#05初サイクリング（前編）

10分後。大成と紗英は紗英の家に到着した。

「とりあえずウェアに着替えてきなよ。」

紗英が言った。

「でもどこで？」

大成が言った。

「私の部屋で着替えれば良いよ。ちゃんとお母さんにも許可は取っているし。」

紗英が言った。

（ガチャ。）

紗英はドアを開けた。

「さあ。入って。」

紗英が言った。

「お邪魔します。」

大成が言った。

（どうぞ。）

家の奥から母の声が聞こえた。

「私の後についてきて。私の部屋は二階だから。」

紗英が言った。

「わかった。」

大成が言った。

（ガチャ。）

紗英はドアを開けた。

「ほお。紗英の部屋って結構広いんだな。」

大成が言った。

「そうかなあ・・・？」

紗英は顔を赤くし頭をかいた。

「まあ、私は部屋の外にいるから着替え終わったら言って。」

紗英が言った。

「わかった。」

大成は言い、着替え始めた。

そして10分後、大成は着替え終わり部屋の外へ出た。

「お待たせ。待たせちゃってごめんな。」

大成が言った。

「ううん。そんなこと無いよ。」

紗英が言った。

「ところでさあ、府中本町から新秋津までどれくらいあるの？距離。

」

大成が聞いた。

「だいたい15kmくらいだよ。」

紗英が言った。

「えっ。そんなに・・・？それじゃあ、3、4時間はかかるんじゃないか？」

大成が言った。

「そんな大げさな！そんなにわからないよ！かかっても1時間半くらいだよ。」

紗英が言った。

「そんなもんなのかなあ？」

大成が言った。

「そんなもんだよ。」

紗英が言った。

「そんなもんだよ。」

（ガチャ。）

紗英はドアを開けた。

「お邪魔しました。」

大成が言った。

（気を付けて帰ってね。）

家の奥から母の声が聞こえた。

「はい！ありがとうございます。」

」

大成は答えた。

「じゃあ、行こう。」

紗英が言った。

「そうだな。」

大成が言った。

「あつ！ちよつと待ってて。家に忘れ物した。」

紗英は言い、駆け足で家の中に入っていった。

5分後、紗英が家から出てきた。

「ごめん。お待たせ。これが無いと自転車乗れないね。」

紗英は言い、自転車の鍵を大成に渡した。

「ありがとう。確かにまだ自転車の鍵もらってなかったな。」

大成が言った。

「じゃあ今度こそ、行こう。」

紗英が言った。

「そうだな。」

大成が言った。そして2人は秋津に向けて自転車を漕ぎ出した。

「マウンテンバイクってすごいな！」

大成が自転車を漕ぎながら言った。

「何で？」

紗英が理由を聞いた。

「だって軽く漕ぐだけでこんなに速度が出るんだから。」

大成が答えた。

「それがマウンテンバイクだもん。っていつか高内くんなら分かってくれるか。」

紗英が言った。

「何が？」

大成は聞いた。

「実はね、この自転車の事を私はずっとマウンテンバイクって言う

てきたけど、実はロードバイクって言うの。」

紗英が答えた。

「じゃあ何で、最初っからロードバイクって言わなかったんだ？」

大成は再び聞いた。

「私も最初はロードバイクって言ってたけど、お母さんが、いつつ
もマウンテンバイクって言ってたから、そのうちに私もマウンテン
バイクって言うようになったんだよ。」

紗英が答えた。

そしてなんやかんやで紗英の家を出発してから30分が経過した。

「この先急な坂があるから、速度上げてね。」

紗英が言った。

「わかった。」

大成が答え、2人は速度を上げ急な坂を越えた。

「ハアハアハア。ツエへ。た・・・高内くん・・・待ってえ。」

紗英が言った。

「えっ？あつ！ごめん！」

大成は言い、後ろを振り返った。すると、ヘトヘトになりながら紗
英がやってきた。

「さ・さすが男の子だね。」

紗英が息を切らしながら言った。

「ごめんな。紗英の事考えずにさっさと先行っちゃって。」

大成が言った。

「いいよ。謝らなくて。別に大丈夫だから。さあ行こう。」

紗英が言った。

「休憩しなくて大丈夫なのか？」

大成は聞いた。

「大丈夫だよ。ただ息が上がってるだけだから。」

紗英が答えた。

「そっかぁ・・・。」

大成が言った。しかし、大成には紗英は大丈夫そうに見えなかった。

「高内くん・・・？どうしたの？行かないの？」

紗英が聞いた。

「えっ？あつ。ごめん。ごめん。行くか。」

大成が答えた。

「うん。行こう！」

紗英は言い、2人は再び自転車を漕ぎ出したのであった。

#06 初サイクリング（後編）

再び自転車を漕ぎ出してから、10分が経過した。

「あの・・・。高内くん。時間まだ大丈夫？」

紗英が聞いた。

「別に大丈夫だけど何で？」

大成は聞き返した。

「ちよつと寄りたいところが二ヶ所あるの。一ヶ所目まではあと5分くらい。」

紗英が答えた。

「そっかあ。」

大成が言った。

そして5分後。

「着いたよ。」

紗英が言った。そこには、古い民家があった。

「何なの？ここ。」

大成が聞いた。

「駄菓子屋さん。私がよく行ってる行きつけの駄菓子屋さん。」

紗英は言い、2人は駄菓子屋さんへと入っていった。

（ガラガラ。）

ドアが開いた。

「おばちゃん！また来たよ。」

紗英が言った。

「あー。紗英ちゃん！いらっしやい！」

駄菓子屋のおばちゃんが言った。

「あれ？お友達？」

駄菓子屋のおばちゃんが聞いた。

「うん。学校の。高内くんって言うの。」

紗英が答えた。

「あ……どうも……。」

大成は言い、軽く会釈をした。

「そっかあ。紗英ちゃんももう高校生なんだね。時が流れるのは早いね。」

駄菓子屋のおばちゃんが言った。

「私もそう思う。小学生だったのがこの間のようだもん。」

紗英が言った。

「ところで高内くん。駄菓子の中では何が好きなの？」

紗英が聞いた。

「いや……。俺、あまり駄菓子とか食べてこなかったから特にこれが好きとか無いんだ。ごめんな。」

大成が答えた。

「そうなんだ。ちょっと待ってて。今選んじゃうから。」

紗英が言った。

「わかった。」

大成が言った。

5分が経過した。

「おばちゃん。これちょうだい！」

紗英が言った。

「210円ね。」

駄菓子屋のおばちゃんが言った。

「はい。」

紗英は言い、お金を渡した。

「210円ちょうどね。毎度あり。」

駄菓子屋のおばちゃんが言った。

「おばちゃんじゃあね。また来るね。」

紗英は言い、2人は駄菓子屋を出た。

「ところで、そんなにたくさん何買ったんだ？」

大成が言った。

「ゼリー系が多いかな？私ゼリー系好きだから。」

紗英が言った。すると紗英は大成に何やら細いチューブのようなものに入ったゼリーを渡した。

「いいのか？もらって。ってかこれ何だ？これもゼリーなのか？」

大成は聞いた。

「そうだよ。“チューブゼリー”って言うの。ちなみにそれはサイダー味ね。あと食べ方は、細くなっている方の先端をハサミで切って食べるの。だけど普段はハサミなんか無いから、歯で食いちぎって食べてるよ。」

紗英が言った。

「意外と大胆なんだな。」

大成が言った。

「エヘヘ。小さい頃からよく言われてた。」

紗英は顔を赤くしながら言った。

15分後、大成と紗英は駄菓子を一通り食べ終わった。

「じゃあ行こっか。」

紗英が言った。

「そうだな。」

大成は答えた。そして2人は自転車に乗り、第二の目的地に向けて自転車を漕ぎ出した。

「紗英。もう一ヶ所行くとこあるんだよな。」

大成が聞いた。

「うん。そうだよ。でも次の場所は、高内くんも行き覚えあると思う。」

紗英が答えた。

「それってどこだ？」

大成は聞き返した。

「昨日会ったスーパー。お母さんに買い物頼まれてるの。何て言うスーパーかわからないけど。」

紗英が答えた。

「ああ。『四日堂スーパー』の事か？」

大成が言った。

「そうそう。そこそこ。」

紗英が言った。

「ああ。だから家出るときリュック持ってたのか。」

大成が言った。

「そうだよ。少なくとも高内くんと私のロードバイクにはカゴ付いてないからね。」

紗英が言った。

「そつかあ。今度ロードバイクに乗るときはリュック持って来なきゃな。」

大成が言った。

15分後、大成と紗英は四日堂スーパーに到着した。

「着いたあ。」

大成は言い、自転車から降り大きく伸びをした。

「お疲れ様。」

紗英はそつと言った。

「ありがとう。」

大成が言った。

「高内くんはもう帰るでしょ？」

紗英が聞いた。

「いや。まだ時間もあるし買い物手伝うよ。」

大成が答えた。

「そう？ありがとう。」

紗英が言った。そして2人は店内へと入っていった。

「ところで、何を買いに来たの？」

大成が聞いた。

「お母さん、カレーライス作るって言ってたから、人参とか玉ねぎとかカレーのルーとかあと、お米も買ってきてって言ってた。」

紗英が答えた。

「じゃあ俺はお米持つてくるよ。5kgで良いでしょ？」

大成は確認した。

「ありがとう。大丈夫だよ。」

紗英が言った。

20分後、紗英のお母さんに頼まれたものを大成と紗英は買い終わり、駐輪場へ向かった。

「手伝ってくれてありがとうね。」

紗英が言った。

「どういたしまして。ってそれよりそんなに荷物あって大丈夫か？」

大成が言った。

「大丈夫だよ。いつもこのくらいあるから。あと、はい。」

紗英は言い、大成の着替えを渡した。

「おっと、忘れるところだった。持たせて悪かったな。」

大成が言った。

「そんなこと無いよ。リュック持つてきてねって言いつれた、私のせいなんだから。」

紗英が言った。

「そっかあ。ありがとう。」

大成が言った。

「うん。じゃあまた月曜日ね。」

紗英が言った。

「ああ。また月曜日な。」

大成は言い、2人は帰路へとついた。

#07クラブ登録

次の週の月曜日、大成は1年3組の教室にいた。

「高内くん。おはよう！」

紗英が言った。

「あつ。紗英か。おはよう。」

大成が言った。

「そういえば今日から一週間、クラブ見学期間でしょ？」

紗英が言った。

「え？そうなのか？」

大成が聞いた。

「そうだよ。だって予定表に書いてあったじゃない。」

紗英が言った。

「そうだったつけ。ちゃんと見てなかったかも。」

大成が言った。

「ちゃんと見なきゃだめでしょ！自分のことなんだから。」

紗英が少し強めに言った。

（もしかして俺のこと意識してる？ま、まさかな。そんなことあり得ないか。でもあり得るのかな？まあ、髪長くて綺麗だし俺のタイプだけど・・・って俺何考えてるんだ？そんな訳ないだろう！）

大成はいろいろと頭の中で考えていると、チャイムが鳴り先生が来た。

「おはようございます。今日の予定はショートホームルームの後10分間の休憩をとり1、2時間目は体育館で顔合わせ会と部活紹介があります。3時間目は、オリエンテーションがあり、4時間目はロングホームルームがあります。以上が今日の予定です。では10分間休憩しましょう。」

新高先生が言った。

10分後。

「では体育館に体育館履きを持って行きましょう。」
新高先生は言い、体育館に行った。

「これより、顔合わせ会と部活紹介を始めます。」
生徒会長が言った。

30分後、顔合わせ会は無事終了し、部活紹介が始まった。
そして、大成と紗英が最も聞いたサイクリング部の紹介が始まった。

「次にサイクリング部、お願いします。」
生徒会長が言った。

「はい。私たちはサイクリング部です。活動内容は自転車について勉強することです。活動場所は工場のMC室が主な活動場所です。活動日は原則、水曜日と木曜日ですが、文化祭の前などは活動日が増えることもあります。最後にお知らせですが、サイクリング部は今年の生徒総会で名称が“サイクリング部”から“自転車部”に変更になる予定です。皆さんの入部を待っています。以上、サイクリング部でした。ご静聴ありがとうございました。」
サイクリング部の部長が言った。

その後の部活紹介とオリエンテーションも無事終了し放課後となった。

「名称変わるんだな。」

大成が言った。

「そうみたいだね。」

紗英が言った。

「でも紗英は入部するんだろう？」

大成が聞いた。

「当たり前じゃない！」

紗英は強い口調で言った。

「あつ・・・ごめん。」

大成は急いで謝った。

「あ・・・いや・・・。こちらこそごめんね。自転車のことになるとつい・・・。」

紗英も謝った。すると2人の顔は瞬時に赤くなっただが、お互いに目をそらした。

（何で紗英と居ると、こう何か変な感じがするんだろう？）

大成は自分に問いかけた。

（何で高内くんと居ると、こう何か変な感じがするの？）

紗英も大成と同じ事を自分に問いかけていた。

「あの・・・。と・とりあえず見学しに行こう。」

大成は顔を赤くしながら言った。

「そ・そうだね・・・。」

紗英も顔を赤くしながら言った。しかし、どう解釈しても“絶対にあの二人、意識してるだろう。”という会話になってしまっていた。そして2人は活動場所である、MC室へ向かった。

そして2人は工場へ向かった。

「MC室って言ってたけど、MC室ってどこだ？」

大成が言った。

「わかんない。」

紗英が言った。すると工場の柱に“サイクリング部はこちら”と書かれた紙が貼ってあった。

「こちらって書いてあるけどこの暗い廊下に行くのか？」

大成が言った。確かに大成が言うように暗い廊下が続いていた。

「無理無理。暗いところ無理！」

紗英が言った。

「でもそれじゃあサイクリング部に行けないぞ。」

大成が言った。

「そりゃあそうだけど・・・。」

紗英は半泣きだった。

「じゃあわかった！俺の後についてこいよ。」

大成が言った。

「うん・・・。ありがとう。」

紗英が言った。

（高内くん、頼もしいな。）

紗英は思った。

「じゃあ、行くぞ。」

大成が言った。

「うん・・・。」

紗英が言った。やはり紗英は怯えていた。そして大成はMC室へ向かい歩き出し、一方紗英は大成の手をしっかりと握り歩いていた。

（ガラガラ。）

大成と紗英はMC室に到着し、MC室のドアを紗英が開けた。

「あの・・・。入部希望なんですけど・・・。」

紗英が言った。

「へ？今何と？」

サイクリング部の部員が中に向けて言った。

「入部希望なんですけど・・・。」

紗英はもう一度言った。

「新入部員来たよ！」

サイクリング部の部員が言った。

（よっしゃー！）

MC室の中から歓喜の声が聞こえた。

「まあとりあえず入って。」

サイクリング部の部員に言われ、二人はMC室へと入っていった。

「入部希望で良いんだよね。見学じゃなくて。」

サイクリング部の部員が二人に聞いた。

「はい。入学前から決めていたので。」

紗英が答えた。

「はい。僕も楽しそうなので。」

大成も答え、2人はクラブ登録用紙を出した。

「日生紗英ちゃんと高内大成くんね。確かに受け取りました。これからよろしくね。じゃあちょっと待ってて。しばらくしたら自己紹介始めるから。」

サイクリング部の部員が言った。

「はい。わかりました。」

2人は声を揃えて言った。

#08 新たに・・・

2人が来てから20分が経過した。

（コンコン。）

ノックの音がした。

（はい。）

部長が言った。

（入部したいんですけど・・・。）

入部希望者が言った。

（まあ、とりあえず中に入って。）

部長が言った。

（あつ。はい・・・。）

入部希望者が言った。

そして入部希望者は2人の横に座った。

（ところで入部希望で良いんだよね。見学しないでいいんだよね。）

部長が聞いた。

（あ・・・。はい。入部希望です。クラブ紹介を聞いて入りたいと思います。ていうか、学校紹介のパンフレットを読んで面白そうなので入部しようと思いました。けど自転車のこともよく知らないし、あまりちゃんとした自転車も持ってないですが大丈夫ですか？）
入部希望者が聞いた。

（じゃあ調べ物学習とかは苦手じゃない？）

部長は聞き返した。

（それはむしろ大好きです。）

入部希望者が答えた。

（じゃあ大丈夫だよ。あとちゃんとした自転車は別に持ってなくても大丈夫。サイクリングするわけじゃないから。）
部長が言った。

（これで安心しました。）

入部希望者は言いクラブ登録用紙を出した。

（日出谷舞狭ちゃんね。確かに預かりました。これからよろしくね。

部長が言った。

（はい。よろしく願いします。）

舞狭が言った。

「日出谷舞狭って言うんだ。これからよろしくね。私の名前は日生紗英で隣に居るのは、高内大成くん。」

紗英が言った。

「あつ。こ・こちらこそよろしく願いします・・・。」

舞狭は小さな声で言った。

「ところで先輩。自己紹介やらないんですか？」

紗英が聞いた。

「ごめんね。今日が登録用紙の受付最後だと思ったんだけどよく考えたら今日クラブ紹介したから、金曜日までだね。待たせてごめんね。今日はもうやること無いから、3人とも帰っていいよ。お疲れ様。」

部長が答えた。

「お疲れ様でした。」

部長に続き3人が言い、2人が先にMC室を出た。

「これからどんなことするのか楽しみだな。」

大成が言った。

「そうだね。」

紗英が言った。

「じゃあ帰るか。」

大成が言った。

「うん！ところであのね・・・。親に“これでお昼ご飯、なんか買ってたね。”って500円もらったんだけど、一緒にどこか食べに行かない？」

紗英が言った。

「あゝ。いいよ。ちょうど俺も親から500円もらって焼き肉屋の500円ランチでも食おうかなって思ってたから。でも焼き肉じゃあ嫌だろっ?」

大成が聞いた。

「いいよ。別に焼き肉で。っていうより焼き肉屋行ったこと無いから行ってみたい。」

紗英が言った。

「え? そうなのか? じゃあ焼き肉屋で良いか。」

大成が言った。

「うん!」

紗英が言った。

10分程歩き、焼き肉屋に到着した。

「いらっしやいませ。何名様ですか?」

店員が聞いた。

「2人です。」

大成が答えた。

「ではこちら席へどうぞ。」

店員は言い、席へ案内した。2人は案内された席に座った。

「網の方熱くなりますのでご注意下さい。注文がお決まりになりましたらブザーでお呼び下さい。」

店員は言い、メニューと水を置いていった。

「500円ランチってこんな感じだな。」

大成は言い、メニューを指差した。

「結構量あるね。でもおいしそう。」

紗英が言った。

「じゃあ注文するな。」

大成が言った。

「うん。」

紗英が言った。

（ピーン、ポーン。）

大成はブザーを押した。

「ご注文をどうぞ。」

店員が言った。

「えーと。500円ランチを2つ下さい。」

大成が言った。

「かしこまりました。少々お待ち下さい。」

店員が言った。

しばらくして500円ランチが運ばれてきた。

「いただきます。」

2人は声を揃えて言った。

「どうだ？おいしいだろう？」

大成は聞いた。

「うん。おいしい！」

紗英は口いっぱい頬張りながら答えた。

2人はいろいろ喋りながら食べ2人は500円ランチを完食した。

「こんなにボリュームがあって500円ってお得だね。」

紗英が言った。

「そうだな。」

大成が言った。

「あんまり長居するのもあれだから、さっさとお会計済ませて出ようよ。待ってる人も居るし。」

紗英が言った。

「だな。」

大成は言い、2人は会計を済まし焼き肉屋を出た。

「あゝ。おいしかった。ぼちぼち練馬駅まで行こう。」

紗英が言った。

「ああ。行くか。」

大成は答えた。

2人はぼちぼち歩き練馬駅に到着した。

（まもなく2番ホームに快速飯能行きが10両編成でまいります。危ないですから黄色い線の内側までおさがり下さい。）

アナウンスが流れた。

「席空いてるかなあ？」

紗英が聞いた。

「さあ？ 昼間だから多分座れるんじゃないか。」

大成が答えた。

（プシュー。ボタン。）

電車のドアが開いた。

「席空いてるか？」

大成が聞いた。

「空いてる！ ちょうど2人分。」

紗英が言った。

「そつかあ。じゃあ座るか。」

大成が言った。

「うん！」

紗英が言った。

（プシュー。ボタン。）

電車のドアが閉まった。

（西武線をご利用下さいましてありがとうございます。この電車は、快速飯能行きです。次は石神井公園、石神井公園です。お出口は右側です。石神井公園を出ますと次は、ひばりヶ丘に止まります。）
発車するとすぐにアナウンスが流れた。すると同時に電車は速度を上げ駅を通過していく。しかし大成はもうすぐ石神井公園駅に到着するという所で肩に重みを感じた。

（ちよつ。おまつ・・・！つまあいいか。眠くなる時間帯だもんな。

このまま寝かせといて秋津の手前で起こせばいいか。
大成は思った。

そして電車は問題無く走りつづけ、もう少しで秋津駅というところまでやってきた。

「おい。紗英。起きろ。秋津だぞ。」

大成は言い、紗英の肩を優しく叩いた。

「スピー……っん？え？うそ！高内くんごめん！」

紗英はキョロキョロしながら言った。

「いいよ。別に。時間带的に眠くなる時間だし。それより早く準備して！電車出発しちゃうから！」

大成は早口で言った。

「あっそうだね。」

紗英は言い、ササッと準備した。

（プシュー。ボタン。）

電車のドアが閉まった。

「あゝ。危なかった。」

大成が言った。

「ごめんね。寝過ごしそうになっちゃって。あと、肩に寄っかかったやつて。」

紗英が言った。

「大丈夫だって。気にしてない。俺も幾度となく寝過ごしそうになつて、しかも隣の人に寄っかかりそうになつたことあるから。」

大成が言った。

2人は改札を出た。

「じゃあなあ。また明日。」

大成は言い、手を振った。

「うん。また明日。」

紗英も言い、手を振った。そして2人は帰路についた。

#09 打ち合わせ

そして同じ週の金曜日になった。月曜日には何も言われなかったの
で、火曜日に紗英と大成の2人は再びMC室へ行ったが“クラブ登
録はしてあるから次来るのは最終登録日の金曜日でいいよ。”と部
長に言われたので、火曜日はそのまま家へ帰った。

「こんにちは。」

2人が言った。

「あつ！紗英ちゃんと大成くん。こんにちは。」

部長が言った。

「おう！全員揃ったか。じゃあ自己紹介でもやるか。2人とも座つて。」

副部長が言った。

「はい。」

2人が言い、自己紹介が始まった。

「じゃあまずは私から。部長の3年5組、コンピューター技術系列あしよりみはねの足寄美羽です。よろしくお願いします。」

美羽が言った。

「副部長の3年2組、オートメカニク技術系列のおがたとすおの直方鳥栖雄です。よろしくお願いします。」

鳥栖雄が言った。

「2年4組の高萩知立たかはぎちりゅうです。よろしくお願いします。」

知立が言った。

「2年1組の添田美春そえだみはるです。よろしくお願いします。」

美春が言った。

「えーと……。1年5組の日出谷舞狭です……。よろしくお願いします。
いします……。」「

舞狭が言った。

「1年3組の日生紗英です。よろしくお願いします。」

紗英が言った。

「同じく1年3組の高内大成です。よろしくお願いします。」

大成が言った。

「以上で自己紹介を終わります。これからよろしくお願いします。」

1年生以外の人は各自の作業に戻って下さい。」

美羽が言った。

「じゃあ1年生集まって。」

美羽が言い、3人は美羽の周りに集まった。

「あのね。来週の土曜日に懇親会を開こうと思ってるんだけどここに行きたいところある？だいたい学校を基準にして電車で一時間ぐらいのところだね。」

美羽が言った。

「じゃあ多摩湖とかどうですか。サイクリングロードもありますし。」

大成が提案した。

「ああ。良いね。私もそこ行ってみたかったんだ。じゃあ多摩湖で良いかな？」

美羽が言い、3人は頷いた。

「でも先輩。私ちゃんとした自転車持ってないんですけど・・・。」

舞狹が言った。

「そっかあ。舞狹ちゃん、ロードバイク持ってないんだよね。じゃあ舞狹ちゃんちってどこ？」

美羽が聞いた。

「練馬高野台です。」

舞狹が答えた。

「だったら当日、練馬高野台駅の改札を出て階段を降りたところで待っててくれる？だったら私の使っていない自転車貸してあげるから。でも色、青だけど大丈夫？」

美羽が言った。

「別に問題ないです。貸していただけるだけですから。」

舞狹が言った。

「よし。この問題は解決つてことで。じゃあ、お知らせ作るから待ってて。」

美羽が言った。

「あと先輩。他の先輩方には聞かなくて大丈夫なんですか。」

大成が聞いた。

「大丈夫。この部活の懇親会はその年の1年生が決めたところに行くっていうのが、しきたりだから。」

美羽が答えた。

そして20分が経過した。

「お知らせ出来たよ。」

美羽が言った。

「早！」

3人の声が揃った。

「あゝ。部長はパソコンに関してはすごいよ。」

鳥栖雄が言った。

「じゃあこれ、お母さんに見せて良いか聞いてきて。じゃあ1年生は帰っていいよ。月曜日の朝に結果聞きに教室に行くから教えてね。」

美羽が言った。

「わかりました。」

3人は言い、支度をしてMC室を出た。

「ねえねえ。舞狹ちゃんも一緒に帰ろうよ。」

紗英が言った。

「いいの？」

舞狹が言った。

「もちろんだよ。あとさあ、連絡先、教えてくれない？」

紗英が言った。

「私……。ケイタイ持ってないんです。すいません……。」

舞狹が言った。

「そうなの？ごめんね。」

紗英が言った。

「いえ。」

舞狹が言った。そして3人はしゃべりあいながらそれぞれの自宅へ帰った。

「ただいま。」

大成が言った。

「おかえり。」

母親が言った。

「これ、参加したいんだけど。」

大成は言い、お知らせを見せた。

「来週の土曜日ね。わかった。いいよ。交通費とお弁当で良いのね。」

母親が言った。大成は母親の許可があっさりと出たので、驚いた。

そして月曜日になった。

「大成くん、紗英ちゃん。どうだった？」

美羽が聞いた。

「僕は大丈夫です。」

大成が答えた。

「私も大丈夫です。」

紗英も答えた。

「じゃあこれで全員大丈夫だね。じゃあ土曜日遅刻しないようにね。あと今週は活動無い代わりに土曜日があるから。」

美羽が言った。

「はい。わかりました。」

2人は言い、美羽は教室へ戻って言った。

#10 集合

土曜日になった。

「舞狭ちゃんおはよう!」

美羽は自転車を降りながら言った。

「お・・・。おはようございます・・・。」

舞狭が言った。

「これが貸す自転車ね。あとこれ。」

美羽は言い、ヘルメットを舞狭の頭にのせた。

「良かった。ちょうどよくて。」

美羽が言った。

「なんでヘルメットなんですか?」

舞狭は尋ねた。

「ロードバイクってスピードが出るから万が一転んだときに頭を守るためだよ。せめてヘルメットぐらいはしてないと危ないからね。」

美羽は答えた。

（ガチャガチャ。）

工具でネジを外す音がしている。

「先輩・・何やってるんですか?」

舞狭が再び尋ねた。

「自転車を解体してるんだよ。電車に持ち込むためにね。」

美羽は答えた。

「じゃあこれもですか?」

舞狭はさらに尋ねた。

「そうだよ。解体して入れてあるよ。」

美羽は答えた。

「よし。出来た。お待たせ。行こう。自転車持って。」

美羽が言った。

（先輩は軽々と持ってるけど、きつと実際は結構重いんだろうなあ

）。。。。。）

舞狹は思った。

「舞狹ちゃん？あつ！もしかして“自転車、きつと重いんだろぅなあゝ。”とか考えてたでしょう？」

美羽が言った。

「え？なんでわかったんですか？」

舞狹が言った。

「え？本当だったの？まあ初めての人はそう考えるんじゃないかなって思ったからだよ。でもそんなこと無いから持ってみな。」

美羽は言い、自転車を舞狹に渡した。

「あつ。。。あれ？意外と軽い。」

舞狹が言った。

「でしょ？じゃあ電車に乗ろう。」

美羽が言った。

「はい！」

舞狹が言った。

（まもなく1番ホームに各駅停車清瀬行きが8両編成でまいります。危ないですから黄色い線の内側までお下がりください。）

アナウンスが流れた。

（プシュ。ボタン。）

電車のドアが開き、舞狹と美羽は電車に乗り込んだ。

そして51分後、舞狹と美羽は西武狭山線西武球場前駅に到着した。

「んっ。。。あゝ。やっと着いたあゝ。」

舞狹は伸びをしながら言った。

「でもまだあと30分くらいはかかるからね。レオライナーって本数少ないから。」

美羽が言った。

「まだかかるんですかあゝ。」

舞狹は嘆いた。

「まあしょうがないよ。距離があるんだから。とりあえずホームには行こう。」

美羽は言い、2人はレオライナーのホームへと移動した。

「あつ！舞狭ちゃん。おはよう！」

紗英が言った。

「おはよう……。」

舞狭が言った。

「あ〜なんだ〜。みんな同じレオライナーに乗るのか。なんか西武球場前駅集合でも良かったな。」

美羽が言った。

「あの……。直方先輩。」

紗英が言った。

「なんだ？」

鳥栖雄が言った。

「美羽先輩ってこんな口調でしたっけ？」

紗英が尋ねた。

「あ〜。足寄って時々男っぽい口調になるんだよ。」

鳥栖雄が答えた。

「へえ〜。そうなんですか。」

紗英が言った。しかし、先輩達と楽しく喋っている紗英と大成とは裏腹に舞狭は深くため息をついた。

「舞狭ちゃん。どうしたの？」

美春が聞いた。

「ちゃんとみんなについていけるかどうか心配なんです。」

舞狭が言った。

「なんか、懐かしいな。そんなこと思うの。」

美春が言った。

「え？何ですか？」

舞狭が言った。

「私も1年の時は舞狭ちゃんと同じ気持ちだったから。だって、体力も無かったし、ロードバイクも持ってなかったから美羽先輩から借りたんだよ。だから本当についていけないのかなって思ったけど、実際は違ってみんなについていけたんだよ。確かに体力は限界だったけど楽しかったし、それなりに得られるものもあったから今も続いているんだよ。だから舞狭ちゃんも大丈夫。ついていけるよ。絶対に。One it self is believed。」

美春が言った。

「ワンイツセ・・・？」

舞狭は美春が、英語で何と言ったのか分からなかった。

「あゝ。One it self is believedっていうのは、日本語で“自分を信じて。”ってこと。」

美春が言った。

（レオライナーが来たぞ。）

鳥栖雄が言った。

「レオライナー来たみたいだね。」

美春が言った。しかし舞狭は不安げな表情を拭えずにいた。

「とにかく大丈夫だから。そんな不安げな顔をしなくても。やってみなきゃ分からないんだから。」

美春が舞狭をさらに慰めた。

「意外に大丈夫なものですか？」

舞狭が言った。

（おい。添田達乗るぞ。）

鳥栖雄が言った。

「はい。今行きます。」

美春は鳥栖雄に向けて言った。

「うん。意外に大丈夫なものだよ。」

美春は一回頷いてから言った。すると舞狭の顔に笑顔が戻った。

「じゃあレオライナーも来たみたいだし。乗ろう。」

美春が言った。

「はい。」

舞狭は返事をし、美春と舞狭はレオライナーに乗り込んだ。

そして7分後、レオライナーは西武遊園地駅に到着し、サイクリング部の7人は改札を出た。

「ついたあゝ。さあ戦いの始まりだ。」

美羽は髪の毛を結びながら言った。

（戦い？）

大成、紗英と舞狭の3人は美羽が言った“戦い”の意味が分からなかった。

#11 懇親会（前編）

そして20分後大成は紗英に、舞狭は美羽に教わりながら自転車を組み立てた。

「全員組立終わったか？」

美羽が言った。

「終わりました。」

全員が言った。

「よし！じゃあ行くぞ！」

美羽は一気にテンションが上がり言った。

「美春先輩。私はどこを走ってればいいですか？」

舞狭が尋ねた。

「ゆっくり後ろからついてくればいいよ。でも私は前の方で走ってなきゃいけないから。でも大丈夫。紗英ちゃんと大成くんが前を走ってるから、なんかあったら2人に聞けばいいよ。2人にはそうやって言つとくから。」

美春が言った。

「はい・・・。」

舞狭はまだ不安を拭えなかった。

「2人とも舞狭ちゃんのことよろしくね。」

美春は紗英と大成に言った。

「はい。」

2人は返事をした。

「じゃあ行こっか。」

紗英が言った。

「うん・・・。」

舞狭はゆっくりと頷き、3人は先輩達の後に続き自転車を漕ぎ出した。

（っていうか、ハンドルのどこ持てばいいの？とりあえずみんなと

同じ持ち方すればいいかな？)

舞狭は思い、自分なりに解釈した。

そして何事もなく懇親会は進んでいたように見えたが、自転車を漕ぎ出してから1時間後事件は起きた。その時の並び順は前から紗英、大成、舞狭の順で走っていた。紗英と大成の間は結構空いていたが、大成と舞狭の間は少ししか空いていなかった。そのため大成は時々舞狭の事を確認しながら自転車を漕いでいた。しかし舞狭はロードバイクに乗り慣れていないせいもあり、よろよると見るに耐えない走り方だった。

(日出谷大丈夫かな?)

大成は思った。すると、後ろから舞狭の悲鳴が聞こえ、自転車が倒れる音がした。大成は急ブレーキをかけ、自転車から降りて舞狭の元へと向かった。

「日出谷大丈夫か?」

大成は言い、舞狭に手を差し出した。

「えっ! あっ・・・うん。大丈夫。」

舞狭は手を差し出されたことに一瞬戸惑ったが大成の手を借り、立ち上がった。

同じ頃紗英も、舞狭の異変に気づき、自転車を止めた。

「舞狭ちゃん! 大丈夫・・・。」

紗英は言い掛けた。なぜならそこには舞狭に手を貸す大成の姿があったからだ。そのまま紗英は、舞狭の元には向かわず先輩の方へ漕ぎ出した。

しかし、紗英自身もなぜこのような行動をとったのか、はたまた何か寂しい気持ちになっているのか分からなかった。

「日出谷。とりあえず大丈夫そうだから先輩達に追いつこう。」
大成が言った。

「うん。ありがとう。」

舞狭が言った。

「じゃあ、ドロップハンドルの曲がってるところの端っこ握って。そうすれば速度出るから。まあその分疲れるとは思うけど……。」

大成が言った。

（体力無いのについて行けるかな……？）

舞狭は思った。

「先輩達と距離が広がらないうちに出発しちゃう。」

大成が言った。

「うん……。」

舞狭は言い、舞狭と大成は自転車を漕ぎ出した。

そしてさらに1時間経ち正午になった。先輩達と紗英は予定の場所に到着した。

「あれ？舞狭ちゃんと大成くんは？確か紗英ちゃん、2人の前走ってたよね。何か知らない？」

美羽は息を切らしながら言った。

「し・知らないです。」

紗英は嘘をついた。本当は知っているのにも関わらず。

「あら。そう？まあもう少し待ってれば来るかもしれないから待ってみよう。」

美羽は紗英に言った。

「わかりました。」

紗英は答えた。

しばらくして、舞狭と大成の姿が見えた。

「2人、来ましたよ。」

美春が言った。

「あら、本当。2人ともどうしたの？」

美羽が聞いた。

「すみません。途中ちよつとしたトラブルがありました。」

大成は息を切らしながら言った。

「あら。そうなの？でもそのトラブルって？」

美羽は聞いた。

「私が途中で転んでしまつてそれで遅れてしまいました。すみません……。」

舞狭は肩で息をしながら言った。

「そうだったの？怪我は無い？」

美羽は聞き返した。

「はい。ヘルメットのおかげで怪我せずに済みました。ただヘルメットに傷がついちゃったんですけどどうすれば……。」

舞狭は落ち込みながら言った。

「それだったら別にいいよ。気にしないで。だってヘルメットは頭を守るものだから、傷ついてなんぼでしょ？」

美羽は舞狭の頭を慰めるかの様に撫でた。

「でも……。」

それでも舞狭は落ち込みながら言った。

「本当に大丈夫だよ。ヘルメットはお金を出せば買えるけど、命は落としちゃったらおしまいでしょ。」

美羽が言った。すると舞狭に笑顔が戻った。

「じゃあ全員揃ったし飯にするか。そこら辺で適当に食つてな。」

鳥栖雄は言い、皆は返事をした。

「紗英！弁当一緒に食わないか？」

大成が言った。

「いや私、先輩達と食べるから。2人で食べれば？」

紗英が言った。

「あ……。そう？」

大成は紗英の予想外の答えに戸惑った。なぜなら普段ならほぼ確実に“いいよ。”と言うはずだからだ。何はともあれ大成は舞狭のもとへ戻った。

「なんか紗英、先輩達と食べるって。」

大成は舞狭に言った。

「じゃあ2人で食べよう。」

舞狭が言った。

「そうだね。2人で食べるか。」

大成が言った。しかし、なぜ紗英が3人で食べることを断ったのか大成には分からなかった。

#12 懇親会（後編）

「いただきます。」

2人は言い、弁当の蓋を開けた。

「それにしてもなんで高内くんの誘いを日生さんは断ったの？」

舞狭は弁当を食べながら聞いた。

「俺もてつきり紗英はいいよって言うと思ったから断られた時は、とても驚いたんだよ。多分そう言ったのには彼女なりの理由があるとは思っただけど、その理由が分からないんだよね。」

大成が言った。

「でもこんなこと……。初めてなんだよね。」

舞狭は急に目の色を変え言った。

「初めてって何が？」

大成は聞き返した。

「男の子とこんなにしゃべるの……。」

舞狭照れながら言った。

「え？あ……。そうなんだ。」

大成は少し困りながら言った。

「そんなこと言われても困るよね。ごめんね。じゃあ気を取り直してお弁当食べようよ。」

舞狭が言った。

「そうだね。食べよっか。」

大成は言い、2人は弁当を食べ始めた。

「そういえば紗英ちゃん。なんで大成くん達の方に行かなかったの？」

美羽が聞いた。しかし紗英は答えられなかった。と言うより答えたくなかった。なぜならあの光景を見てしまったからだ。

「紗英ちゃん。どうしたの？なんかまずいことでも言っちゃった？」

美羽は問いかけた。

「いえ。何でもありません。それより弁当食べながら自転車の話しましょうよ。」

紗英が言った。

「あら、そう？じゃあそうしょうか。」

美羽が言った。

「そういえば、日出谷の弁当って美味しそうだけど誰が作ってる？」

大成が言った。

「一応私んだけど・・・。」

舞狭が言った。

「へえゝ意外だな。料理苦手そうだし。」

大成が言った。

「ひどいよー！」

舞狭は頬を膨らませ言った。

「ごめん、ごめん。冗談だよ。冗談。」

大成が言った。

「もう！気を付けてよ。」

舞狭が言った。

「紗英ちゃん？」

美春が言った。

「へ？あつ。すみません。」

紗英が言った。

「そんなに気になるなら一回向こう行ってきなよ。」

美春が言った。

「でも・・・。」

紗英が言った。

「ほら。気になるなら早く行きなよ。」

美春が言った。

「ああ〜っ！もう気になる！先輩方すいませんが行ってきます！」
紗英は言い、弁当を持ち大成と舞狭が居る方へ向かっていった。

「おお！紗英。いきなりどうしたんだ？」

大成が聞いた。

「いや……。2人がどんな話してるか気になっちゃって……。」

紗英が答えた。

「だったら誘ったときに来れば良かったのに。」

大成が言った。

「いや。それは……。」

紗英は言葉を失った。

「まあ。いいや。それで今話してたのは日出谷の弁当がかわいいうてこと。」

大成が言った。すると舞狭は赤く頬を染めた。

「じゃあ私も一緒に食べていい？お弁当持って来ちゃったし……。」

「

紗英が言った。

「誘いたかったからいいよ。」

大成が言った。

「ありがとう。ところで本当に舞狭ちゃんのお弁当美味しそうだね。」

「

紗英が言った。

「そう？ありがとう。」

舞狭は言い、さらに赤く頬を染めた。

「あと舞狭ちゃん。そんなきれいに卵焼き、どうやって作るの？」

紗英が聞いた。

「別にいいけど、口じゃあ説明しづらいよ。」

舞狭が言った。

「だったら日出谷の家に行けばいいんじゃないか？」

大成が言った。

「私はいいいよ。明日お母さん一日仕事で居ないから2人できなよ?」
舞狹が言った。

「やったあ! いいの?」

紗英は言い、舞狹は軽く頷いた。

「ごめん。明日用事があるんだ。」

大成が言った。

「あつ。そうなの? だったら私1人で行くよ。」

紗英が言った。

「じゃあ・・・。10時半ぐらいに練馬高野台駅の改札口前ね。」

舞狹が言った。

「わかった。」

紗英が言った。

そして30分経過した。

「3人ともそろそろ行くよ。」

美羽が言った。

「はい!」

3人が言った。

「あの・・・。美羽先輩。」

舞狹が言った。

「ん? なに?」

美羽は舞狹を見た。

「また元来た道に戻るんですね。」

舞狹が聞いた。

「うん。そうだよ。」

美羽が答えた。

「体力持つかな・・・?」

舞狹は小さな声で言った。

「多分・・・。大丈夫だよ。私もそうだったから。でも、意外に体

力って持つものだよ。だけど辛いと思っても歯を食いしばって頑張んなきゃ、体力だつてつかないからね。そうやって私も体力をつけたんだよ。だから頑張ろう。」

美羽が言った。

「はい！頑張ります。」

舞狹が言った。

「じゃあ行こう！」

美羽は6人全員に向かって言った。

「はい。」

6人全員の声とともに美羽を先頭にして残りの5人は自転車を漕ぎ始めた。

昼食は摂ったものの、さすがに皆疲れているのか午前中とは違い、会話もさほど無くひたすら自転車を漕いでいた。しかし、舞狹は皆とは少し違った。なぜなら、他の人たちは疲れてはいるが決して会話が出来ない状態ではないが、舞狹は体力の無いせいもあり会話はどこか皆について行くのも大変だった。

（みんな待って・・・。）

舞狹は心の中で必死に訴えた。無論、心の中なので伝わるはずもなく時間だけが過ぎていった。

そのまましばらく経ち舞狹はふとあることを思い出した。

『辛いと思っても歯を食いしばって頑張んなきゃ、体力だつてつかないからね。』

それは美羽の言葉だった。舞狹は美羽に言われたとおりに歯を食いしばった。

（美羽先輩が言ってたことってこういうことかあ。でもこのままじゃあ絶対置いて行かれちゃう。どうしよう・・・。）

舞狹は思った。すると舞狹は、またあることを思い出した。

『ドロップハンドルの曲がってるところの端っこ握って。そうすれ

ば速度出るから。』

それは午前中、舞狹が転んだときに大成から教えてもらったことだった。

（とりあえず追いつかなきゃ。みんなに迷惑はかけたくない。）

舞狹は再び思い、ドロップハンドルの曲がつてるところの端っこを握り、さらに歯を食いしばり自転車を強く漕ぎ出した。

「到着……。全員居るよね？」

美羽は息を切らしながら言った。

「美羽先輩。舞狹ちゃんが居ません。」

紗英が言った。

「まあ、待てば来るよ。」

美羽が言った。

（あつ……。みんなが居る。もうちょっと……。）

舞狹は思った。

「美羽先輩。舞狹ちゃん来ました。」

紗英が言った。

「ほら。言ったとおりでしょ。」

美羽が言った。

「遅れてすみません。」

舞狹は肩で息をしながら言った。

「別に大丈夫だよ。じゃあみんな帰ろうか。」

美羽が言った。

そして30分後、皆各々の自転車を解体しそれぞれ帰路についた。

#13 手解き

次の日。紗英は西武池袋線の練馬高野台駅の改札口の前にいた。

「あつ。紗英ちゃん。」

舞狭は紗英のことを見つけ駆け寄った。

「おはよう。ごめんね。遅くなっちゃって。」

紗英が言った。

「大丈夫だよ。私も今来たところだから。」

舞狭が言った。

「ところで舞狭ちゃんちってどこなの？」

紗英が聞いた。

「うーん。ここから歩いて15分くらいかな？」

舞狭が答えた。

「結構掛かるんだね。」

紗英が言った。

「そうだね。少し遠いのが難点なんだよね。」

舞狭が言った。

「でも、料理を教えてもらうんだからこれくらい歩いてても苦にならないけどね。」

紗英が言った。

「そう？ありがとう。じゃあ、案内するからついて来て。」

舞狭が言った。

「うん。」

紗英が答えた。

そして2人は練馬高野台駅を出て舞狭の家に向かって歩き始めた。

「ところでなんで舞狭ちゃん料理を始めたの？」

紗英が聞いた。

「私って元々シングルマザーで小さい頃から家にお母さんは仕事で

居ないことが多かったの。さすがに小学生の時はご飯は用意してから出掛けてくれてたけど、毎朝早く出て行くのに私の朝ご飯を作ってるせいでさらに起きてるってことに気が付いたの。だから、自分でレシピ本とか図書館で借りてきて料理を作り始めたのがきっかけかな。」

舞狹が説明した。

「へえ。いろいろと深い事情があるんだね。ところで今もレシピ本は図書館で借りてるの？」

紗英は言い、聞いた。

「中学生の時は借りてたけど、高校生になってからは買ってるよ。」
舞狹が答えた。

「じゃあ、もうレシピ本は何冊もあるの？」

紗英は聞き返した。

「うーん……。何冊あったかな？数えたこと無いから分からないや。ごめんね。」

舞狹が答えた。

「別に謝らなくても良いよ。」

紗英が言った。

しばらく話しているとあっという間に舞狹の家に着した。

「ここが私の家だよ。」

舞狹が言った。

「あつ。一軒家なんだ。アパートかなって思ったけど。」

紗英が言った。

「エヘヘ。やっぱりみんなそう思うんだ。“アパートだと思ったのに意外と一軒家なんだ。”って。」

舞狹が言った。

（ガチャ。）

舞狹は家のドアを開けた。

「入って。」

舞狹が言った。

「お邪魔します。」

紗英が言った。

「じゃあとりあえず靴脱いだら、こっち来て。」

舞狹が言った。

「はい。」

紗英が言った。

そして2人は二階に上がり舞狹の部屋に入った。

「うわあゝ。レシピ本たくさんある！見てもいい？」

紗英が言った。

「別に良いけどそんなにあるかなあゝ？」

舞狹が言った。

「うん。たくさんあるよ！」

紗英が言った。

「そう？ありがとう。」

舞狹が言った。そして紗英はレシピ本を開いた。

「あつ！これ美味しそう！」

紗英が言った。

「本当だ。美味しそう。じゃあこれにする？作るの。」

舞狹が言った。

「えっ？でもこれ難しくない？」

紗英が聞いた。

「まあ確かに難易度の差はあると思うけど、そんなに難しかったらそもそもそのレシピ本に載ってないでしょ。」

舞狹が答えた。

「あゝ。確かに。」

紗英が言った。

「じゃあこれでいいかな？」

舞狹が聞いた。

「うん。いいよ。」

紗英が答えた。

「じゃあとりあえず買い出しに行こう。」

舞狹が言った。

「うん。」

紗英が言った。

そして2人は舞狹の家を出て近所のスーパーに向かった。

「そういえば舞狹ちゃん。足痛くない？」

紗英が聞いた。

「えっ？なんで？」

舞狹は聞き返した。

「だって昨日の今日だし。」

紗英が答えた。

「うん。痛い・・・。」

舞狹が言った。

「やっぱり舞狹ちゃんも痛いんだ。良かった。私だけかと思った。」

紗英が言った。

そうこう話しているとあっという間に近所のスーパーに到着した。

「あっ！白菜安い！買つとこう。」

舞狹は店先の張り紙を見ながら言った。

「そんなに白菜安いの？」

紗英が聞いた。

「うん。このスーパーはいつも安いけど、白菜は特に安い。」

舞狹が答えた。

「へえ。そうなんだ。」

紗英は言い、スーパーの中へ入った。

「舞狹ちゃん。何買うの？」

紗英が聞いた。

「とりあえず、ケチャップとミックスベジタブルと卵かな？紗英ちゃん是他に入りたい具とかある？」

舞狭は答え、聞き返した。

「特に無いよ。」

紗英が答えた。

「じゃあこれで買ってくるね。」

舞狭が言った。

「うん。」

紗英が言った。

「お待たせ。じゃあ帰ろうか。」

舞狭が言った。

「うん。」

紗英が言った。

2人は来た道を戻り、舞狭の家に戻ってきた。

「じゃあ時間もちょうどいいし作り始めようか。」

舞狭が言った。

「そうだね。お腹も空いてきたし。」

紗英は言い、2人は手を洗い料理を作り始めた。

「そういえば舞狭ちゃんってさあ、料理のことになると目の色変わるよね。なんか積極的になるし。」

紗英が言った。

「あつ！ごめんなさい・・・。」

舞狭が言った。

「いや。別に怒ってるわけじゃないから大丈夫だよ。私だって多分自転車のことになれば目の色変わるんだろうし。」

紗英が言った。

「そっかあ。私だけじゃないんだ。よかった。」

舞狭が言った。

しばらく経ち、ケチャップライスが完成した。

「じゃあ玉子を作るよ。」

舞狹が言った。

「そうそう。玉子が難しいんだよね。オムライスって。」

紗英が言った。

「まあ確かに最初は難しいよ。焦げやすいしね。でもコツを掴めば出来るようになるよ。」

舞狹が言った。

「うん。コツを掴めるように頑張る。」

紗英が言った。

「じゃあ作ろう。」

舞狹が言った。そして2人はオムライスの玉子作りに取り掛かった。

「そうそう。フライパンの柄の部分をコンコンって叩くようにして・

・・。」

舞狹が言った。

「こんな感じ？」

紗英が聞いた。

「そうそう。紗英ちゃん。上手！」

舞狹が答えた。

「そう？ありがとう。」

紗英が言った。

10分が経過し無事にオムライスは完成した。

「いただきます。」

2人は言い、オムライスを頬張った。

「ん〜。美味しい。これが家でも作れば良いのに・・・。」

紗英が言った。

「じゃあ、今日作ったオムライスのレシピが載ってる本貸そっか？」
舞狹が言った。

「え？いいの？」

紗英が言った。

「うん。いいよ。」

舞狭が言った。

「ありがとう。」

紗英が言った。その後もしばらく舞狭の家で2人で料理のことやら学校のことやら色々話し、紗英は自宅に帰って行った。

#14 出場種目決め

「さて今日は分かっているとは思いますが、もうすぐ開催される体育祭の出場種目を決めたいと思います。」

新高先生が言った。

（何にする？）

クラス全体がざわつき始めた。

「はいはい。静かに。今から種目名を書くので出たい種目のところに名前をチョークで書いてください。」

新高先生は言い、黒板に種目名を書いていった。

「ねえ、ねえ。高内くんは何にするの？」

紗英が聞いた。

「うーん……。障害物かな？協力プレイ苦手だし。」

大成が答えた。

「そっかあ。じゃあ私も障害物にしようかな？」

紗英が言った。

「そうか。じゃあ一緒に頑張ろうぜ。でも希望通りにならなかったらどうするんだ？」

大成が言った。

「うーん……。まあその時はその時じゃない？」

紗英が言った。

「まあそりゃあそうだね。」

大成が言った。

「とりあえず名前は全員書いていただいたので、男子の方は決まりですが、後一人女子が竹取競争に動いていただければ決まりなんです。女子で動いてくれる人はいませんか？」

新高先生が言った。

（でもまあそこって女子1人だよな？）

クラスの女子がどよめいた。

「じゃあ．．．．私がやります！」

紗英が言った。

「皆さん、日生さんでいいですか？」

新高先生は皆に聞いた。

（．．．．）

誰も反応しなかった。

「では日生さんに決定します。日生さん、ありがとうございます。」

新高先生が言った。

「紗英いいのか？本当は障害物やりたかったんじゃないあ．．．．」

大成が言った。

「そりゃあそうだけど、『その時はその時だよ。』って言ったじゃん。それに私が立候補すれば早く決まるでしょ。」

紗英が言った。

「確かにそうだけど。」

大成が言った。

「でも．．．．本当は一緒に出たかったな．．．．」

紗英は頬を赤らめながら大成に小さな声で言った。

「そんな後悔するくらいだったら最初っから立候補しなければよかっただろう。」

大成が言った。

「高内くん．．．．鈍いよ。」

紗英はさらに小さな声で今度は頬を膨らましながら言った。

「ん？なんか言ったか？」

大成が聞いた。

「何でもないっ！」

紗英は少し怒ったように言った。すると大成は何が起きたのかわからず慌てていた。一方紗英はそんな大成を面白がり、しばらく怒った振りをしていた。

そして体育祭の出場種目決めは終了した。その後も色々決め事を決めたがすんなりと決まり放課後になった。

「高内くん。部活行こう。」

紗英が言った。

「ああ。そうだな。行くか。」

大成が言った。

「こんにちは。」

紗英はMC室のドアを開け2人で言った。

「あれ？舞狭ちゃんだけ？」

紗英が聞いた。

「うん。先輩達はさっきまで居たけど、先生に用事があるからって部屋から出て行ったよ。」

舞狭が答えた。

「そつかあ。すれ違わなかったなあ。まあいいや。ところで舞狭ちゃんは何は体育祭の出場種目何にしたの？」

紗英はさらに聞いた。

「障害物競走だよ。」

舞狭が答えた。

「あつ。俺と一緒にだな。」

大成が言った。

「本当！？よかった。」

舞狭は突然満面の笑みになり言った。

しかしその舞狭の見たことのない満面の笑みに紗英はどこか羨ましくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7321w/>

君のいる場所へ

2011年12月31日10時45分発行